KOBE KAZOKU

神戸佳族

Vol.44
2013
9・10

兵庫・神戸の芸術文化交流 & 発信基地　兵庫・神戸CSメール

西田眞人　秋咲く　2013年作

opinion

「文化創生都市」　神戸市長　矢田立郎

神戸・創造人の肖像

自分らしさを失わず ふるさと・神戸に恩返ししたい
久元喜造

久元 喜造

PROFILE

ひさもと・きぞう　1954年兵庫区生まれ。神戸市立川池小学校（現会下山小学校）、小部小学校、山田中学校、灘高等学校を経て東京大学法学部に入学。76年に自治省（現総務省）に入り、自治行政局行政課長、大臣官房審議官、自治行政局選挙部長などを歴任。出向で京都府地方課長や札幌市財政局長なども務めた。自治行政局長を最後に総務省を辞職。2012年11月から13年6月まで神戸市副市長を務めた。

自分らしさを失わず ふるさと・神戸に恩返ししたい

長年、総務省で地方自治に携わり、2012年11月から今年6月まで神戸市副市長を務めた久元喜造さんに、生まれ育った神戸のまちの魅力や目指すべき将来像などを語っていただきました。

―神戸生まれ、神戸育ちとのこと。幼少期の思い出を聞かせてください

小学5年生まで新開地に住んでいました。そのころは、聚楽館（しゅうらくかん）などの劇場や多くの映画館があり、「東の浅草、西の新開地」と呼ばれ、娯楽のまちとしてにぎわっていました。自宅2階の物干し場に上がると、どこからか三味線や小唄が聞こえてきたものです。

昨年、神戸市副市長を拝命して帰神し、40年ぶりに神戸で生活していますが、まちのどこを歩いても懐かしく感じますね。特に湊川公園はよく遊んだ思い出の場所。神戸タ

自宅近くの湊川神社で七五三をした時の様子。「よくセミを取って遊びました」と久元さん

ワーや遊園地、アコーディオンを弾きながら軍歌を歌う傷痍軍人と、訪れるたびに当時の風景がよみがえってきます。

―久しぶりに住まれて、あらためて神戸の魅力を感じたのでは

東京の大学を卒業後、旧自治省に入省し、公務員人生の大半を霞が関で過ごしました。さらに石川県や青森県、京都府、札幌にも住みました。それぞれに良さを感じましたが、豊かな自然や文化度の高い生活環境など、神戸は他都市に比べて格段に魅力があると思います。独自のブランド力を持っているのは神戸ならではの強み。明治の開港以来、外来文化を積極的に取り入れて発展してきた神戸には、新たなものを追求し、育てようとする開放的な気風や風土が今もなお息づいています。それが〝神戸らしさ〟につながっているのではないでしょうか。

また、神戸市は戦前から日本の地方自治をリードし、戦後「山、海へ行く」の都市経営で名をはせました。このような輝かしい歴史や伝統を磨き上げ、神戸の地位をさらに高めていくことが望まれます。

―ここ10年、地方自治制度の改革に打ち込んでこられました。副市長就任を引き受けた決め手は

制度を動かす仕事をふるさとでできることにやりがいを感じたのはもちろん、阪神・淡路大震災時、何一つ神戸の役に立てなかったという強い後悔の念があったのも理由の一つです。震災当時、札幌で勤務しており、テレビをつけると、建物が倒壊した三宮の風景が目に飛び込んできました。生まれ育ったまちが炎に包まれている様子が映し出された時は、悔しくて涙が止まらなかったです。そんな思いもあ

中学生のころは、池でフナ釣りをするのが趣味。引っ越した北区は自然も多く、シマミミズを餌にして釣りを楽しんだという。

神戸のまちの全景。「より魅力的な都市を目指していきたいですね」と久元さん

り、公務員人生の最後に故郷に恩返ししたいと、引き受けました。

地方自治体で仕事をしていたので予備知識はありましたが、初めて市政に関わる身。恐らく職員の皆さんと私との間で価値観に違いがあると感じていたので、初めから新しい風を吹かせようと力まず、対話をしながら少しずつ自分の個性やカラーを出していくよう努めました。

―神戸の目指すべき将来像についてどのような意見をお持ちですか

デザインを生かしたまちづくりをさらに進めていく必要があると思います。２００８年、神戸市はユネスコ・創造都市ネットワークのデザイン都市に認定され、デザインを生かしたまちづくりを進めています。デザインと聞くと難しく考えがちですが、神戸が持つ資源にデザインの視点を加え、さらにハイセンスでファッション性の高いまちをつくっていくというものです。これは建物などに限ったことではなく、まちの表示板や観光案内板などにも言えること。それらのデザイン一つでまちの印象はぐっと変わります。そのような取り組みを今後も市全体で進められたらいいですね。

また、芸術文化の力は元気な神戸の実現に欠かせません。実際、震災から立ち上がろうと市民の気持ちを奮い立たせてくれたのは、芸術文化の力だったと聞きます。その意味で、今秋開催の「神戸ビエンナーレ２０１３」は、市民とアーティストがつながる場であり、新たな感性との出合いや、まちの魅力の再発見につながります。ぜひ、会場に足を運んでいただき、芸術文化に触れて大いに盛り上がってほしいです。

―今後、ご自身が進まれる道についてどのように考えていますか

副市長就任期間は7カ月と短かったですが、得たものは多く、新たなスタートラインに立った今の私の支えになっています。

人間は年を経るごとに記憶力や瞬発力は弱くなりますが、一方で、一つの物事を深く考え抜く力や、経験に裏打ちされた直感力が養われます。このような習得を死ぬまで続けることが人生なのかもしれません。これまでに得た経験や知識を基に、今後も自分らしさを失わず、神戸のため、ひいては社会のために役に立つ存在でありたいと思っています。故郷への恩返しはまだまだこれからです。

「神戸ビエンナーレ2013」会場周辺